

## ■研究ノート

# ラーニング・コモンズにおけるピア・サポート活動 — 宇都宮大学「コモンズ学生スタッフ」の事例から —

## A Consideration of Peer Support Activities in the Learning Commons : A Case Study of the “Commons Students Staff” Belonging to Utsunomiya University

桑島 英理佳\*  
KUWAJIMA, Erika

**要旨：**本稿は、宇都宮大学のラーニング・コモンズにおける「コモンズ学生スタッフ」のピア・サポート活動について報告するものである。学生にとって親しみやすいラーニング・コモンズを目指すために、開設当初からピア・サポート活動の導入を検討していたが、専任スタッフが時間をかけて利用する学生の自主性を促していくことで導入に至った。当初の学生スタッフの関心は利用のマナーなどの環境に関することが中心であったが、主催イベントの企画運営や学生や他部署からの相談対応に携わることで、双方に一定の効果がもたらされた。現在では学生スタッフが学生の学びを直接支援することや、学生同士の学び合いを間接的に支援するという意識が向いてきている。活動の支援を行う専任スタッフに求められることには、良好な関係性のなかで自主性を促していくこと、学内に広く活動をアピールしていくこと、ファシリテーターとして学生スタッフ同士の学び合いを促すこと、専任スタッフ同士で連携すること等をあげた。

**キーワード：**ラーニング・コモンズ、ピア・サポート、学生スタッフ、学び合い

### 【目次】

はじめに

第1章 ラーニング・コモンズの概要

第2章 「コモンズ学生スタッフ」の取組み

第1節 第1期（2013・2014年度）

第2節 第2期（2015年度）

第3節 第3期（2016年度）

まとめと今後に向けて

### はじめに

宇都宮大学のラーニング・コモンズでは、学生にとって親しみやすい空間を構築し利用を促進していく為に、ピア・サポートが展開されることを期待して「コモンズ学生スタッフ」を導入した。2017年3月現在、9名が活躍し、主に主催イベントの企画運営、PR活動、学生や他部署からの相談対応等を行っている。筆者はラーニング・コモンズの専任スタッフの一人として、この「コモンズ学生スタッフ」の養成に携わってきた[1]。

日本の多くの大学においてピア・サポート活動が展開されており、その種類は学習支援、学生生活に関する相談対応、留学生のサポートなど多岐にわたるが、ラーニング・コモンズを拠点にしたピア・サポート活動に関する研究は少ない。本稿ではまずラーニング・コモンズにおけるピア・サポート活動として「コモンズ学生スタッフ」のこれまでの取組みを報告する。そして成果として

\* 宇都宮大学基盤教育センター特任助教

見えてきたことや専任スタッフによる活動支援の視点について考察し、今後の展望について検討したい。

## 第1章 ラーニング・コモنزの概要

ここでは「コモنز学生スタッフ」（以下、学生スタッフ）が活動の拠点としている本学のラーニング・コモنز（以下、コモنز）について紹介する。

コモنزは2013年に開設され、学生同士の話し合い学習を基軸としたアクティブラーニングを展開しやすい環境を整備してきた[2]。具体的には可動式ホワイトボードやグループワークに適した大きさの机などが設置されており、付箋や模造紙などの文具も自由に利用できるようになっている。多くの大学がコモنزを設置しているなか、本学の特色をあげるならば、第一に運営を担当する担当教員や事務補佐員などの専任スタッフが配置されていることであろう。担当教員が主に学生や教職員の相談対応とこれから述べる学生スタッフの養成を、事務補佐員は受付に駐在しており、主にスペースの予約管理や環境整備を行っている。第二に学習や話し合いを進める上で有用な知識や手法を紹介するセミナーや、特定のテーマや作業を通じて自由に意見を出し合うイベントを定期的に行っていることである。第三として、1階のオープンスペースが24時間オープンしていることであり、本学の学生はいつでも利用することができる。

以上のような環境のなかで、学生はアクティブラーニング型授業の教室として利用する他、授業で出されたグループ課題やプレゼンテーションの練習に取り組む、サークルでのミーティングやワークショップを実施するなど授業時間外学習の場としても活用されている。コモنزで開講される科目数も、学生グループによる利用件数も年々伸びている。また、オープンスペースで昼食を取る、友人と談話するといった学習以外の利用も認めており、居場所のような機能も見られ、長期休暇期間以外はほぼ毎日にぎわいを見せている。

## 第2章 「コモنز学生スタッフ」の仕組み

ここでは、学生スタッフのこれまでの活動の経緯を次の3つのフェーズに区切り報告する。活動の機運の高まりを見せた2013年度および2014年度を第1期、導入した2015年度を第2期、組織化した2016年度を第3期と位置付けることにする。

### 第1節 第1期（2013・2014年度）

コモنزを拠点にしたピア・サポート活動は、コモنزの活性化を目的に開設当初から検討していたものの、導入のタイミングを待つことにした。まずはコモنز自体の運営体制や環境を整え、設置目的をアピールし、学生と専任スタッフの関係性を築いてから学生の自主性を促そうと考えた為である。徐々に意識づけを行うために2013年9月には「ラーニング・コモنزをどうしたい？」というテーマでワークショップを開催し学生と利用しやすいコモنزの在り方について意見交換を行った[3]。また、定期的に利用する学生に対し、日々の会話のなかで、クリスマス等の季節の飾り付けの作業を共にしながらさり気なく意見を聞いてきた。

コモنزを利用する学生が増えていくと同時に問題も出てくるようになった。特に夜間において雑談で騒がしく話し合いに支障が出ているという意見が寄せられたことから、2014年6月には「夜のコモنزを語ろう！」というテーマでワークショップを開催し、夜間利用で問題となっていることやその解決策について話し合った[4]。そして出されたアイデアの一部を専任スタッフが試行的に実施するに至った。その他にもゴミや貸出備品の放置、テスト期間中における席の不足等の問題があった。そこで、定期的に利用している学生でこれらの問題を解決したいと話していた3名に声をかけ、試験期間中の夜間に、はじめて学生スタッフとして試行的に配置した（2015年1月15日～2月4日の平日18～22時）。業務としては、席が不足した際の補充、ゴミや貸出備品の管理等である。3名の学生はこの学生スタッフの経験を経て、専任スタッフに対し自主的に前日の夜間利用の様子を報告し、利用のマナーについて記載した啓発ポスターを作成する等、これまで以上にコモنزに意識が向けられるようになった。

### 第2節 第2期（2015年度）

活動の機運の高まりを見せたことを契機に、また、新入生に対して同じ学生の立場からコモنز利用を呼びかけることを目指し、2015年3月に担当教員から学生スタッフの組織化を促した。試行的に学生スタッフを経験した3名の学生を中心に、定期的に利用している学生で関心がありそうな学生に直接声をかけたところ9名が集まった。そして4月2日に第1回のミーティングを実施し、活動の手はじめとして新入生を対象とした相談対応を行うことで、新入生のコモنز利用の促進を目指すことが学生ス

スタッフ間で提案され、実施に至った。平日の空きコマを活用してシフトを組み、履修やサークル、アルバイトに関すること等幅広い相談に対応した（4月9日～24日の平日）。

その他の活動内容は、環境美化活動、コモンズのPR活動、受付の補助等であった。注目したいことは、前年度までは専任スタッフが企画運営を行っていた主催イベントについても、担当教員の指導のもと学生スタッフに企画運営させたことである。それまで主催イベントの参加者数が伸び悩んでいたことにより、学生目線での企画運営にすることで、より多くの学生が参加することを期待していた。前年度に学生同士の学び合いの意識の醸成を目的に、学生が講師を務め特技や関心を他の学生に教えるというセミナーを実施し、双方に効果が見られていたので引き続き講師に学生を起用することにした〔5〕。テーマや進め方などの大枠は専任スタッフが提案し学生スタッフは講師の選定と打ち合わせ、広報活動、当日の運営を行った（イベントの具体的な内容については資料を参照）。

以上のような学生スタッフの活動を通じて、学生スタッフ自身とコモンズを利用する学生双方に成果があったと考えられる。学生スタッフによるレポート〔6〕を見ると、成果として概ね次の三点があげられる。第一に同じ学生という立場の学生スタッフが駐在することで、学生が気軽にコモンズを利用できたことである。第二に学生が利用しやすくなるために、学生スタッフが利用者目線に立ち、コモンズ運営について考え提案することができたことである。第三に受付補助や主催イベントの企画運営を通じて、学生スタッフがアクティブラーニングや学生同士の学び合いの重要性を理解できたことである。

さらに、2015年度は導入のフェーズであり、学生スタッフも専任スタッフも試行錯誤で進んできたが、次年度の活動の枠組みを築けたことも成果としてあげることができるだろう。2016年3月末には卒業や留学その他の理由で実質4名しか残らなかったが、「来年度も新入生相談会はやった方が良い」、「やるからにはこうした方が良い」等といった声があがり、活動の道しるべや活動意欲は残されていた。

成果と共に課題も見えてきた。第一に、学生スタッフの所属学部にも偏りがあったことである。コモンズが国際学部棟に隣接していることもあり、同学部の学生の利用が多かったことから、必然的に学生スタッフも9名中6名が国際学部の所属であった。それゆえ、主催イベントの内容や講師の選定においても幅が広がらないことが問題視された。第二に、主催イベントの企画において、担当

教員が学生スタッフの自主性をもう一步促せなかったことである。前述したように、主催イベントのテーマや進め方は担当教員から提案することが多く、学生スタッフはその枠組みの中で思考し活動するのみで、学生目線で「こういうことをやってみよう」という提案までには至らなかった。ミーティングも担当教員から促しており、学生スタッフが主体となって活動計画を立てる、活動のふり返しを行うということにはなかった。第三に、新たな仲間を養成することができなかったことである。前期にピア・サポーター養成を目的とした基盤教育科目「宇大を学ぶ」を開講した。内容は本学の歴史や基盤教育を学ぶ意義を理解し、ピア・サポーターとして活躍するためのファシリテーションスキルを実践的に学ぶというものであった〔7〕。履修した学生は身に付けた力を必ずしもコモンズで発揮しなければならないというわけではなかったが、コモンズや学生スタッフについて積極的にPRしたものの、結果的に志願する学生はいなかった。

### 第3節 第3期（2016年度）

2年目の活動も新入生の相談対応から始まった。また、前年度の課題を受け、様々な学部から学生スタッフを集めることを目指し相談対応と同時にPR活動も行った。その結果、教育学部生2名の志願に繋がった。動機は相談対応してくれた学生スタッフが親切なことに感銘を受けたこと、活動内容に関心があったこと等があげられた。また、前年度に引き続きピア・サポーター養成を目的とした授業「宇大を学ぶ」を開講したところ、履修途中の農学部生2名が最終回を待たずに活動を始めたいと志願してきたので受け入れることにした。「宇大を学ぶ」については、前年度と比べ学生同士による話し合い学習を多く取り入れ、さらにグループを固定せずに様々な学生と交流できるように工夫をした。志願してきた2名のうち1名が他学部生との交流がおもしろかったと話していたので、ピア・サポート養成を目的とした授業として一定の効果が垣間見られた〔8〕。

こうして6月から合計8名で活動することになった。週にひとり2コマずつシフトを組んで活動した。この年度から学生スタッフ専用の机を受付付近に設置した。するとシフトがない時でも気軽に滞在するようになり、居場所としても確立していった。そして学生スタッフ同士や専任スタッフとはもちろん、コモンズを訪れた学生や教職員と交流する姿も見られた。また、新メンバーの歓迎会や忘年会など学生スタッフ間や専任スタッフとの親睦を深める機会も度々実施されるようになった。

活動内容の大枠は前年度とほぼ同様ではあるが、学生スタッフが活動することで、本年度もコモンズを利用する学生と学生スタッフ双方にとっての成果が見られた。第一に主催イベントの充実である。本年度はペアで1本ずつ企画運営を担当させてみることにした。コンセプトはこれまで通り学生同士の学び合いにこだわり、ペアで話し合いながら学生スタッフ共通の企画書に記入することから始めた。すると前年度の実践を基にアイデアが出され、専任スタッフでは考えつかないようなテーマであったり、講師についても友人を推薦してくるようになったりと学生目線のイベントが展開された。そのなかで、講師である学生の生き方や考え方に触れるようなイベントは「生き様シリーズ」と名付けられ定番化するまでになった。初参加の学生も増え、少数ではあるが教員の参加も見られた。学生同士のみならず、学生と教員の学び合いにも発展した。そしてイベントの終了後は自然と学生スタッフが集まり、イベントのふり返りをしたり担当者を労ったりする姿が見られるようになった。

第二にミーティングの充実である。全体でのミーティングは月に1回程度実施するようにした。話し合う内容については専任スタッフから提示することが多かったが、進行や記録は学生スタッフに任せた。後期に入る直前には、専任スタッフがファシリテーターとなり、前期の活動の成果や自身の学び、後期に携わってみたいことを出し合うワークショップ型のミーティングも実施した。ミーティングを行うという意識が定着し、学生スタッフ側から実施を呼びかけるようになってきた。

第三に学生や他部署からの相談対応が増え、学び合いの支援の意欲が喚起されたことである。まず、コモンズを定期的に利用している動画制作グループが学生スタッフにエキストラ出演を依頼してきた。このグループの代表の学生は以前コモンズ主催イベントの講師を務めた経緯があったことから依頼しやすかったのだろう。また、男女共同参画推進室主催のオープンキャンパスイベントの補助も依頼された。具体的には、来場者へのPR活動と進学相談対応である。さらに、教育学部総合人間形成課程の必修授業では、コモンズ利用を促進できるようなイベントの企画運営をテーマにPBL学習が行われ、ここでは学生スタッフがこれまでの企画運営の経験をいかし、教育学部生にPR活動や企画内容についてアドバイスする姿が見られた。学生スタッフも教育学部生が企画したイベントに参加することで新しいアイデアを得ることができ、まさに学生同士の学び合いが展開された。これらの経験を経て、学生の学びを支援する意欲が高まったことが年度末の話し合いで確認された。

組織化を進めてきた2016年度であったが、次年度に向け専任スタッフが取り組むべき課題は、主に次の2点があるだろう。第一に、学生同士の学び合いに関心が高まってきているうちに、本年度のように学生や他部署との関わりを持つことができるように、学生スタッフの活動を学内に広く積極的にアピールすることである。また、支援の方法について学ぶ研修を実施していく必要もあるだろう。具体的にはファシリテーション、企画立案の仕方等を考えている。第二に、第1期から活動してきた学生スタッフ、いわばスターティングメンバー3名が卒業するので、残ったメンバーたちがリーダーシップを発揮できるように促していくことである。

2015年度は活動の枠組みを築き、2016年度は様々なことにチャレンジしてきた。しかし月1回程度のイベント開催は負担だったという意見も聞かれた。活動を軌道化し学内にアピールすることを意識して展開してきたが、来年度は活動内容をスリム化し、特に学生や他部署の相談対応に力を入れ、活動の質を高めていきたいと考える。

## まとめと今後に向けて

本稿では、コモンズにおけるピア・サポート活動として本学の学生スタッフの取組みについて報告した。コモンズ開設当初から導入を検討していたものの、すぐに組織化したわけではなく、まずは専任スタッフが学生と関係性を築くことを心がけた。気軽に話しかけることのできる身近な教職員として、コモンズの問題や実現したいこと等を共有することで徐々に自主性を促してきた。

当初は利用のマナーなどの環境に関わるのが注目されていたが、学生スタッフ自身が主催イベントの企画運営や学生や他部署からの相談対応に携わることで、現在では学生スタッフが学生の学びを直接支援することや、学生同士の学び合いを間接的に支援するという意識が向いてきており、新たなフェーズを歩み出そうとしている。今後学び合い又は学び合いの支援が展開されるなかで、どのような効果もたらされたかという点から検証していきたい。それを広く学内にアピールすることで学生や教職員と学生スタッフとの関わりが更に増え、関係性のなかでコモンズならではのピア・サポート活動の意義を確認することができ、活動意欲も喚起されていくだろう。

さて、新たなフェーズを歩むにあたり、専任スタッフによる活動支援が今後より重要になってくるだろう。まずはこれまでと同様に良好な関係性のなかで自主性を促

していくことである。これには学生スタッフの養成について研究し実践する担当教員と、日々同じ空間で顔を合わせ直接的に活動を支援している事務補佐員との連携が求められる。宮浦が述べるように「年ごとに入れ替わる学生一人ひとりの状況を的確に判断」[9]することは連携なしには不可能なことである。さらに担当教員としてはファシリテーターの手本として学生スタッフ同士の学び合いを促すことで活動意欲を高め、ピア・サポートの手法を体験しながら学ぶことができるように努力していきたい。同時に学内の教職員や他のピア・サポートグループにも関わってもらいながら養成していきたい。そして学生スタッフの活動が学内に認識されていくことで、ピア・サポートの重要性を広く発信していきたい。

最後に、本稿で取り上げたピア・サポート活動の成果は、専任スタッフの日々の観察や学生スタッフによるレポート、個人ヒアリングから見えてきたものである。今後は学生スタッフのみならずピア・サポートの対象である学生に対しても調査を行い、成果を明らかにしていきたいと考える。

## <脚注>

- [1] 2013年6～11月に事務補佐員として、2014年12月～現在に至るまで担当教員として携わってきた。事務補佐員として携わった実践については以下を参照のこと。桑島英理佳「ラーニング・コモンズにおける学習支援に関する一考察」、宇都宮大学地域連携教育研究センター『宇都宮大学地域連携教育研究センター研究報告書 第22号』、2014年、29～33頁。
- [2] <http://lgec.utsunomiya-u.ac.jp/lc/>
- [3] 宇都宮大学基盤教育センター『平成25年度宇都宮大学プロジェクト経費実践報告書』、2014年、41～42頁を参照のこと。
- [4] 宇都宮大学基盤教育センター『平成26年度宇都宮大学プロジェクト経費実践報告書』、2015年、89頁を参照のこと。なお、筆者はこの時期は他部署に所属していた為このイベントには関わってはならず、他のコモンズ専任スタッフによって企画実施された。
- [5] 前掲書、87～88頁を参照のこと。
- [6] 宇都宮大学基盤教育センター『平成27年度宇都宮大学プロジェクト経費実践報告書』、2016年、33～35頁。
- [7] 詳しいカリキュラム等については、前掲書、39～40頁を参照のこと。
- [8] ヒアリングを2017年2月13日13:00～13:30に実施した。
- [9] 宮浦崇「大学の教育情報化支援におけるピア・サポート体制の現状と課題—立命館大学の取り組みを中心に—」、『年会論文集 第27号』、2011年、181頁。

<資料>

【2015 年度commons学生スタッフが企画運営したラーニング・commons主催イベント】

日程	テーマと講師
4月7,8日	第1回カフェ・commons 「どこよりもゆるくどこまでも ゆるい新入生歓迎お茶会」
6月26日	第2回カフェ・commons 「テスト対策編」
7月7日	第3回カフェ・commons 「夏休みの過ごし方を語ろう」
11月11日	第5回commons30分セミナー 「俺らの語学勉強法」 講師：渡邊雄一（国際学部3年） 山田慶（国際学部2年）
11月30日	第4回カフェ・commons 「るみの部屋vol.1」 ゲスト：山根健治（農学部教授）
11月17日	第5回カフェ・commons 「学生が教える「イチオシ」 Book Report」 講師：渡邊翔（国際学部3年）
1月13日	第6回カフェ・commons 「るみの部屋vol.2」 ゲスト：ガーランド・ローリンズ （基盤教育センター非常勤講師）

【2016 年度commons学生スタッフが企画運営したラーニング・commons主催イベント】

日程	テーマ
4月8,9,10日	第1回カフェ・commons 「どこよりもゆるくどこまでも ゆるい新入生歓迎お茶会」
4月19日	第2回カフェ・commons 「じもトーク」
5月24日	第3回カフェ・commons 「ミニマリストの生き様を知ろう」 講師：仲村祐一（農学部3年）
6月29日 7月5日	第1回30分セミナー 「優へと至る30分 2016夏」 講師：若園雄志郎 （地域デザイン科学部准教授）
7月11日	第4回カフェ・commons 「デニスの生き様を知ろう ～わしは日本で生きるのです～」 講師：Birjukov Denis（交換留学生）
11月29日	第5回カフェ・commons 「旅人の生き様を知ろう」 講師：秋野功作（国際学部4年） 小倉涼（国際学部4年）
12月19日	第6回カフェ・commons 「大道芸SHOW」
1月12日	第7回カフェ・commons 「正月、襲来。」
1月17日	第2回30分セミナー 「優へと至る30分 2017冬」 講師：若園雄志郎 （地域デザイン科学部准教授）